

# 悪い子が善い子に「変身」する法

言葉の力ですべてが現実化する

子供の天才を引き出すには子供の生命を見る、(中略)  
結局子供の生命の実相を見るのでありますが、その生命がどういうことに出口を求めて生きようとしているかということを見て、その出口に「迎え水」を与えなければ本当の教育というものは成り立たないのであります。

たとえば、子供が卓上に何かを落とすとすると、物が落下する、音がする——これは子供にとっては実に不思議な現象である。手を離すと床の上に落ちる、落ちると反



動で跳び上がったたり、転覆くつがえつたりする、なかなかおもしろいから幾度いくどでもやってみる。まだまだいっそう高い所から落としてみると、どういふふうになるだろう、反動が強くて、跳び上がり方がおもしろい。またこう、また落とす、ますますおもしろいからやっている、あまり上から落とすとポーンと割れる——子供にとっては、先には割れなかったのに、今度は割れた、実に驚異である。もう一度割ってみる——ところが、大人にとっては、この子供はことさらにコップを床に投げて割った、実に乱暴なる子供であるということになるわけです。それで、

「なんとという貴様はいたずら小僧の悪い奴だ！」と言って  
て囀鳴りつける。すると、ここに子供の世界にはじめて、  
言葉の力で「悪」というものが出現するのです。「悪」  
だと言わなければ、それは「悪」ではない、悪童だとい  
わなければ悪童ではない。それが、「お前は悪童だ」と  
いう言葉によって「俺は悪童かな。悪童だから、こうい  
う悪いことをする性質だな」と子供の心に印象されて、  
せつかく「今」この子供の伸びようとしているものが伸  
びないことになり、変な方に曲がってしまうのです。そ  
ういう場合にも、これは悪童である、これは乱暴な子供  
であると思ってしまうのは、「仮の相」に執われている  
のであって、「実相」を見ないものである。子供の実相  
を見る教育をするためには、何のために子供がこういう  
ようにこんなものを落つこととして転覆してみたりする  
のであるかという、その奥にある生命の流れを知らなけ  
ればならないのであります。(中略)子供は「わたしは  
悪い子だな、わるい子はコップを破る、悪い子だから  
コップを破るのはあたりまえだ」と、そういうぐあい



してわるい子供というものが、言葉の力でこの世に現実  
化してくるのです。(頭注版『生命の實相』第28巻・97〜99頁)

### 子供は実験しながら生命が伸びてゆく

ところが「これは落としたりから破れたでしょう。破れ  
たら二度と水が入らないでしょう。これじゃつまらない  
でしょう。だからこれから破らないようにしましょう  
ね」とだんだん教えていって、破ったことに対して、  
破ったらこういう結果になる、こういうぐあいになるか  
ら二度としてはつまらないと知らせる。叱るのではな  
い。最初のそれは子供にとつては実験みたいなものなん  
ですから、その破れたことに対して破れたら、「ここへ  
水を入れてごらんさい。入らないでしょう。そら水が  
入らぬ、水が流れる、水が流れ出たら、あなたお水が飲  
みたくても飲めないでしょう」というような塩梅式に、  
子供がコップを破ったことに対してでもそこにいろいろと  
生命を引き出す教育ができるわけであって、それを「お  
前はコップを破ったから悪童である」といって、頭ごな

しに断言してしまうと「わたしは本来悪童というもので、善いことはできない者だ」と、子供の生命の善さが押し込まれてしまうのであります。

すべての子供はみな善人であってわるい子供なんて本来ひとりもいないのです。だからわれわれは、大人の気持でもっと子供を押し量<sup>はか</sup>って自分の幼時の記憶を忘れてしままい、幼児の行為の形だけを見て「汝<sup>なんじ</sup>は悪人である」というような断言や嘯<sup>と</sup>鳴りをすることは慎まねばならない。子供というものは何でもいろいろと実験しながら、その生命が伸びてゆく。だから、茶碗を破る実験も時にはいいのでありますから、(中略)そういう物を破壊した場合には、それに伴<sup>ともな</sup>うて不結果が起こるということを理解させたら、茶碗を破った実験も無駄にはならない。「茶碗が破れたら、そんな御飯を入れても入らない、水を入れても入らない、そうすると食べたくても食べられない、つまらないことでしょう。これから大切にいたしましょうねえ。こうして大切に静かに取り扱ったらいつまで使っても破れないでしょう」という塩梅式に教え



てゆけば、そこに本当に生命を引き出す教育ができるのであります。(頭注版『生命の實相』第28巻・99〜100頁)

**建設的な方面に子供の生命力の発言を導く**

あらゆる場合を通じて「悪」というものは一つもない、ただ子供にはその生命が溢<sup>あふ</sup>れ出よう、出ようとしている。その方向をリードしてゆくのがわれわれの指導であります。生命力を押し込まずに導いて、その次には「こういう具合にしましょうね、ああいう具合にしましょうね」と言って破壊を転じて建設的方面に子供の生命力の発現を導いてゆくのであります。そしてそこに建設的な何物かが子供の力でできた場合には、大いに言葉の力で賞<sup>ほ</sup>める。すると、悪いことをした時に「あなたは悪人だ」といってそこに悪というものがはじめて出て来たのと同じように、今度は言葉の力によって、善なる子供がただの理念の世界だけではなく、現実の世界に確実性をもつて出来るのであります。

(頭注版『生命の實相』第28巻・100〜101頁)